おおさか KEYわーど 第9回

〝衣装競似顔双六〟

―「お若けえの、お待ちなせいやし」と呼び止められても慌てず騒がず―

写真：「衣装競似顔双六」全図

子どもの時の正月の思い出は何だろう？　東京オリンピック（1964）と大阪万博（1970）の間に小学生であった私は、空堀商店街（大阪市中央区）の脇にある駄菓子屋で、凧やら独楽やら福笑いやらを買ってもらった。男兄弟ばかりなのに羽子板まであって、羽根を打ち返す“カン!”という堅い音を覚えている。しめ縄に門松も揃い、元旦の町にもどこか正月の艶やかな風情があった。〈双六〉もお正月気分を代表する遊びである。専門知識が必要な囲碁将棋ではなく、一家団欒で遊べ、年末の漫画雑誌の付録も〈双六〉だったこともあって自分たちで作ったりもした。

話はここからである。昔、お得意さんに正月を愉しく過ごしてもらおうと〈双六〉を「歳暮御祝儀」の配りものにすることがあった。すでに大阪の文化史資料になったかとも言えるが、有名なのが大丸呉服店の〈双六〉である。浮世絵師に刷らせた贅沢な錦絵で、明治末から大正はじめにかけて五種類が確認できる。

明治42年（1909）の「大阪／電車／大丸呉服店案内雙六」は、通称「電車双六」で知られる名作である。大阪駅から市電に乗り、市内の名所32コマをサイコロの目に従い遊覧する。つづく翌明治43年の「令嬢成長双六」は、いとさん誕生から嫁入りまでを〈双六〉にあつらえた。さらに今回、表紙に用いた翌々年の「衣装競似顔双六」は顔見世の季節も意識し、役者絵を描いた羽子板が30個、並んで構成され、八艘飛びのように駒を進めていく。絵は「菅原伝授手習鑑」の松王丸、「金門五三桐」の石川五右衛門、「心中天網島」の紙屋治兵衛、「勧進帳」の義経、「伽羅先代萩」の政岡、「仮名手本忠臣蔵」の大星由良之助、「本朝廿四孝」の八重垣姫、「廓文章」の伊左衛門などで、筆者が表紙撮影の演出のため、サイコロを購入したことも記しておこう。

大正元年（1912）の「振出衣装人気双六」も全34コマに歌舞伎を描き、大正2年（1913）の「日本女装沿革雙六」は、上古時代をふりだしに上がりの大正時代まで、各時代の女性を時代考証を採り入れて描いた18コマで構成される。

こんなに悠長でシンプルな遊びは、テレビゲームにくぎ付けになった今の子どもには退屈だろう。私の世代も「モノポリー」「人生ゲーム」などが登場し、次第にそれに夢中になっていった。「モノポリー」など最近、大人のノスタルジーで復活し、大阪を舞台にした御当地版まであるという。

大阪と〈双六〉でもうひとつ思い出すのが、天才役者、藤山寛美が主演した松竹新喜劇「人生双六」である。筋立てそのものは、織田作之助の小説「アドバルーン」をヒントにしたと思えるが、不遇な二人の男が、偶然の出会いに奮起し、五年後には出世して再会しようと約束して別れた。その約束の日に何が起きたか、結末やいかに?

言えることは〈双六〉同様、人生は思うようには進んでくれない。ふりだしに戻るかゴールに上がるか、苛立ったり、あせる必要もないが、今年こそ足元を固め、よい目をふりだして進んでいきたいものである。

筆者プロフィール
橋爪 節也 はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館教授／大学院文学研究科（兼任）。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室主任学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念　木村蒹葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念　佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』（創元社）など。